

<研究会報告>

第36回例会報告

1996年6月8日に、本会の第36回例会が筑波大学学校教育部（東京都文京区大塚・東京教育大学跡）において行われた。例会で行われた藤井千春先生の講演と、小田島数幸・杉浦正和・藤森秀明・森田泰司各先生（筑波大学大学院修士課程教育研究科現職派遣教諭）によるシンポジウムにおける提案の要旨は以下のとおりである。

<講演要旨>

経験主義社会科の再評価

藤井千春*

I 問題解決学習とは、子どもたちによる自主的な調べ活動と話し合い活動を柱として、その二つの活動が順繰りに、必然性をもって繰り返し展開されてゆく学習活動である。つまり社会生活における事実を調べて、その意味について考え合い、新たな疑問が生まれてまた調べ直し…、というようにして展開されてゆく学習活動である。

そして経験主義社会科としての問題解決学習においては、次の二つを学習活動において経験させることが重要である。

- ① 調べ活動において、地域の社会生活における事象や人と直接的に接触させること。
- ② 話し合い活動において、他者の異なった考え（意味付け）とかかわり合って自分の考えが揺さぶられ、調べ直し・考え直しをすることで自分なりの考えが深まること。

本発表においては、この点についての意義を明確にすることにより、J. デューイの経験主義学習理論に基づく社会科の問題解決学習の再評価のための観点を提起する。

II J. レイヴとE. ウェンガーは『状況に埋め込まれた学習』において、産婆、仕立屋、操舵手、肉屋などの職業への新参者が、どのようにして熟練者になってゆくかについてのプロセスを分析している。それによると新参者は、ゆるやかな「ごく限られた責任しか負わない」が、「最終的な産物とつながっている」「観察的な見張り以上の仕事」を与えられる。そして熟練者のやり方、完成した製品、兄弟子の学習などを見つつ、日常生活の仕方やものの感じ方、仲間との接し方、仕事についての語り方など、「実践の文化」を学んでゆく。このように「正統的周辺参加」、すなわちその実践共同体の周辺的な仕事を、その共同体の一員として分担しつつ学習はなされてゆくのである。

社会科の学習活動では、子どもたちを社会生活における事象や人と直接的に接触させても、すべてが「正統的周辺参加」となるわけではない。準拠的参加に留まる場合が多い。しかしこの主張の論点は、ある意図した結果を生み出すためのやり方についての学習は、脱文脈的にはなされないことを明確にした点にある。つまり学習者は実際に成し遂げることに参加しつつ、実際にやっている様子を見つつ学習してゆくという点にある。そこの具体的な一場面において

視知覚を通じて得られた、一面的で特殊であったとしても、そのような知識を出発点として学びを継続し、深めてゆくのである。

- Ⅲ R. ローティは、プラグマティズムの知識観を再評価し、知識の価値を「実在」との対応によってではなく、それをを用いて意図した結果を生み出すことに役立つかによって決定することを主張する。ローティによれば「実存」と対応した知識、すなわち真理を究明しようとする試みはムダなのである。したがって世界をある観点から意味づけようとする考え方について、相互に競合する母型（パラダイム）が存在した場合、そのどちらが正しいかを外部の権威（実在）に対応させて決定することはできないのである。この点で哲学が果たす役割は、どちらの考え方が正しいかを判定することではなく、相互の考え方どうしが相互理解するための解釈を橋渡しすることである。

相互の考え方の理解は「会話 conversation」によってなされる。「会話」では、異質な考えの闘いによる弁証法的な一致ではなく、異質な考えとの出会いと共生的をめざした相互理解がめざされる。むしろ刺激的で実りある不一致が希望されるのである。

従来は話し合い活動は「討論」の概念で捉えられてきた。つまり話し合い活動は考えと考えの対決の場であり、どちらが正しいかに決着を付けることをめざしてなされるとされてきた。しかし「会話」に基づき「語り合い」の概念で捉えることを提起する。つまり話し合い活動は考えと考えの交流の場であり、異なった考えの相互理解を通じての自分なりの考えの深め合いをめざしてなされると捉えるのである。そこでは相手を説得する話し方よりも、相手を理解する聞き方が重視される。異質なものととの共生が図られるのである。

- Ⅳ 調べ活動においては社会生活における事象や人との直接的な接触により「あれもこれも」見させよう、聞かせようとするのではなく、「自分にとって一番心に残った様子、一言」を得させることが大切である。そこから習得される知識は少なく、一面的であったとしても、その子なりに掴んだ知識の持つ意味について考えさせ、その子なりの追究の継続・発展を支援することが教師の役割となる。また話し合い活動においては「正解」ではなく、それぞれの発言の背後にある考え方を明確にさせ、その相互理解を通じてのそれぞれなりの考えの深まりをめざさせることが大切である。子どもの発言の根底にある考え方の解釈者、そしてそれぞれの考え方の交流の媒介者であることが教師の役割となる。

* 茨城大学教育学部

<例会シンポジウム提案要旨>

筑社学第37回例会発表趣旨

小田島 数 幸*

『現場教育の諸問題とその解決』と題したテーマに沿い、北海道の高等学校における先導的な教育実践事例を挙げ、身近な教育改革としての学校改革を紹介した。北海道の高等学校の特徴として、2間口以下の高校、いわゆる「小さな学校」が全体の30%を占めており、生徒数の減少ともなう学校のリストラ、つまり高等学校の適正配置計画からの回避が急務とされる中での「特色ある学校づくり」であること。そして、中・大規模においても多様化する生徒への対応としての教育改革が展開されていることを報告した。そして、北海道に限らず他の都道府県においても、さまざまな教育改革が必要に迫られ試みられている中で、どのような青年教師を現職側が求めているのかを伝えようとする内容となった。具体的には、今の生徒の気質を表現できると思われる資料を2点引用しながら、ハードな生活をこなしている現場教師の実態を理解してもらい、教師にとってのメンタルな部分での強化を、この在学中から培ってもらいたいという期待を込めて行った。その結果、理解に苦しむ点への質問や現職教員からの意見が多数寄せられ、拙い実践報告、説明・答弁が参加者によって盛況なものへと形が変わっていくこととなった。

* 筑波大学大学院修士課程

受験教育と本当の学習

杉 浦 正 和*

- ① 私立高校では、ワンマン体制の学校もあるが、教員の移動がないために教員集団として強固な伝統と文化を持つ学校がある。科目を専門化（政治経済の担当など）すれば授業のノウハウを蓄積できるのに、昨今の公立学校ではこの方法が少なかったようである。指導困難校の場合ほどそうである。私はずっと「現代社会」「政治経済」をやってきた。そのおかげで授業内容も方法も工夫を加えることができたと思っている。
- ② 本校の目標に「厚みのある学力」がある。受験学力としても、丸暗記とかではない広い問題意識がないと、早慶などの上位大学には受からないからである。その意味で受験教育と本当の学習は矛盾しないと考えられている。進路指導を1年次から徹底して適性や希望を明確にさせて、大学進学 of 生徒は2年次3学期から受験勉強させて現役合格させるが、基礎は日頃の学習習慣であり、特別の受験指導を前面には立てていない。
- ③ 私は、1年生「政治経済」を担当してコメ自由化や原爆投下、自衛隊PKO派遣など社会的論争問題でディベートをやってきた。生徒同士が社会問題を討論する中で問題意識を深め、社会的思考力を高めて「厚みのある学力」に貢献してきたと考えている。

* 筑波大学大学院修士課程

私が、三重県社会科教育研究会でめざしてきたこと

藤 森 秀 明*

「子どもの見方・考え方を育てる授業」の研究主題の下で、①子どもの実態の適切な把握、②効果的な資料の教材化、③問題解決的な授業構成や、教師の適切な出場・出方等の考察などを通して、ややもすると表面的な知識や制度的な内容の教え込みに偏りがちな社会科教育から脱却し、一人ひとりの子どもの見方・考え方が育つような授業を行うことを目標に活動してきた。以下にそのめざす子ども像とその研究への取り組みを示す。

<めざす子ども像>

- ①社会事象やその変化に興味を持ち、自ら学ぶ意欲をもって学習に参加しようとする子ども。
- ②疑問や問題を解決したりするために資料を収集し、活用することができる子ども。
- ③資料を活用したり、他の子どもの意見を取り入れたりしながら、思考・判断することのできる子ども。
- ④自己の考えやその内容、学習内容などを筋道だてて表現できる子ども。
- ⑤学習で得た力をもって社会の変化に主体的に対応し、よりよい社会を築いていくために、意欲的に考え、行動しようとする子ども。

<研究への取り組み>

- ①学習目標を明確にし、問題解決的な指導過程や授業形態について考える。
- ②効果的な資料の教材化について考える。
- ③多様な評価方法を考察し、多角的、総合的に評価資料を収集する。

* 筑波大学大学院修士課程

子どもたちに生きた社会科を！

森 田 泰 司*

小学校5年生の社会科の授業である。単元は「わたしたちの生活と情報」。その中の「放送局で働く人々」での模擬体験学習である。キャスター役のA子、B子は水を得た魚のように自信満々で役になりきっている。いつもはおとなしくて目立たないC男が、地味ながらも真剣な表情で音響機器を操作している。カメラマンや照明担当、美術担当、レポーターそれぞれが、自分の役割を生き生きとしかもなりきって演じている。スタッフ会議も白熱する。担任はただ、にこにこ「頑張ってるね」と励ますのみ。

番組が完成すると、3つの収録班が自分たちの番組を自己評価し、他の班を評価する。ただし、悪いところは責めない。よかったところを中心にお互いが認め合う。放送局の真似事をしながら子どもたちは、仕事の大変さ、苦労を実感する。教科書や本の調べ学習では、絶対にわかりえないことだ。

こういう授業こそ、子どもたちが生き生きとした授業であり、生きる力へ結びつくものである。手を抜く気ならいくらでもできる密室の学級王国。しかし、明日の子どもたちの未来のために、一つでも多くの実践を積み重ねていきたい。

* 筑波大学大学院修士課程